

通信教育課程卒業生のアンケート調査結果

Results of the questionnaire survey for correspondence course graduates

通信教育課程 浅見 美穂 工藤 千草* 小野 京子 浅野 雅子
Correspondence Course Miho Asami Chigusa Kudo Kyoko Ono Masako Asano

住居学科 定行 まり子
Dept. of Housing and Architecture Mariko Sadayuki

* 2020 年 4 月より被服学科

抄 録 本稿は、日本女子大学通信教育課程卒業生の会の協力を得て行ったアンケート調査の報告である。入学者は、昭和期は若年層の高校卒や短大卒、保育・学校教育関係就労者が多かったが、平成期では大学卒者が増加し、年齢の幅や就労内容は多様に広がり、入学時の状況は多様化している。入学の目的は、大学卒業のほか資格取得、生涯教育が多く、本学の選択理由として家政学の学びや伝統は不動である。仕事や家庭生活との両立を目指して通信教育を選択し、在学期間は長い人が多いが、目的を達成した人は 9 割近くおり、目的以外の収穫も多く挙げている。卒業後は進学、資格取得、就職、キャリアアップなど様々な展開がある。専門科目の学びや卒業したことが自信になり、生き方や地域活動、日常生活など多方面で学びが活かされている。今後の本課程の充実へ向けて、多様な世代や目的に対応するカリキュラム再編成、ICT の活用による学習指導方法などの示唆を得た。

キーワード：通信教育、生涯教育、家政学、キャリアアップ、多様性

Abstract This paper is based on a questionnaire for the graduates in Correspondence Course of Japan Women's University. The ages and occupations of new students are diversifying. The purpose of admission is mostly graduation, qualification acquisition, and lifelong education, and the reason for choosing this university is the study and tradition of Home Economics. Many students with various aims choose the Courses to balance family life, work life with student life, and they have many outcomes. After graduation, there are various developments such as going on to graduate school, acquiring qualifications, finding employment, and improving careers. They are confident that they have studied and graduated from specialized subjects, which can be utilized in various fields such as life style, community activities, and daily life. To enhance this course in the future, we received suggestions such as curriculum reorganization corresponding to various generations and purposes, and learning guidance methods by utilizing ICT.

Keywords: Correspondence education, Lifelong education, Home Economics, Career enhancement, Diversity

1. 研究の背景と目的

平成 30 年文部科学省では、一人ひとりのライフステージに対応した学び直しとして、リカレント教育などの生涯教育の推進をうたっている¹⁾。日本女

子大学家政学部通信教育課程は、創立者成瀬仁蔵が 1908 年に女性の生涯教育と高等教育の発展を期して創設し、1949 年新制発足から 2019 年には創立 70 周年を迎えた。2020 年現在、家政学を通信教育で学べる唯一の大学である。生涯教育への関心の高ま

りがみられる中、本課程においても通信教育の学びの意義と、教育方法を考える時期に来ている。今後の展望を考える上で、これまでの卒業生の実態の分析は不可欠である。しかしながら本課程では学生の卒業後の状況を把握する年次的な仕組みはなく、卒業生の個々の実態を確認できる資料は乏しいのが実情である。そこで卒業生の会の協力を得て、本課程での学びが卒業後にどのように活かされているのか、その動向を知るためのアンケート調査を行った。

日本女子大学通信教育課程卒業生への既往調査は、1991年日本女子大学女子教育研究所による調査²⁾と、2000年真橋美智子らによる調査³⁾が既に実施されている。調査³⁾では1～40回生の1/4を抽出し、通信教育、卒業後の生活や再教育、全人的発展、家政学部の評価などを行っている。通信の卒業生の全体的な傾向は提示しているが、学科別の特色や経年的変化などは明確に示されていない。

本稿ではさらに、創立から現在までの時代による変化や、近年の入学生の状況や卒業生の傾向にも注目し、今後の本学の通信教育課程や学科の専門科目や、学習指導方法を考察することを目的とする。

2. 調査対象と方法

調査対象者は日本女子大学通信教育課程卒業生の会「もみの木会」会員1321人、1～68回生（卒業年は1952～2019年）である。アンケート調査は質問紙法により、調査の実施日は2019年12月2日～20日、有効回答者数は579人（有効回答率43.8%）である（表1）。

3. 入学時の状況

3.1 入学時の年齢と最終学歴

入学時の年齢は18歳から67歳と幅広いが、時代により大きく変化している。昭和期（1949～1988年）は20歳代中心の若年層であるが、平成期（1989～2016年）では若年層は減少し、40～60歳代が増加し年齢層の幅が広がっている（図1）。なお2019年度入学者の年齢⁴⁾では70歳代もあり、さらに高齢層に広がる一方、40歳代の次に多いのは20歳代であり、若年層が再び増えて来ている。

入学時の最終学歴は、昭和期、平成期とも高校卒と短大卒とで約3/4を占めている。大学卒業者の割合は昭和期入学（3%）よりも平成期入学（6%）で増加している。なお2019年度入学者では大学卒は

40%であり⁴⁾、高学歴化の傾向はさらに進んでいる。全国的な女子の大学進学率⁵⁾が1955年（2.4%）であったのが、1989年（14.7%）、2016年（48.2%）と上昇していることと呼応している^{註1)}。入学者に大卒者が増加していることは、大学を卒業してもなお「更に学びたい」という意欲のある人が増えていると言える。

3.2 入学時の就労状況

入学時に就労しているのは416人（72%）である。就労者率は、昭和期入学（71%）から平成期入学（75%）と増加している。

入学時の業種は、「保育・学校教育関係」（37%）が最多で、次に「公務員」（15%）が多く、この傾向は3学科同様である。児童学科、食物学科では続いて「医療関連業」が多く、生活芸術学科では他学科に比べ業種は多様である。時代による変化では、昭和期よりも平成期では教育関連が減少し、業種は分散している。その傾向は児童学科より食物学科、さらに生活芸術学科で顕著である。

入学時の職種は「教育職」（30%）が最多で、次に「事務職」（21%）、「専門職」（16%）が上位で、3学科とも同様である。児童学科は「保育職」、食物学科は「専門職」、生活芸術学科は「技術職」の割合が他学科より高い。昭和期から平成期への変化として、児童学科では教育職と事務職の割合が微増

表1 回答者の概要

	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代	90歳代	不明	合計(人)
児童学科	3	15	52	46	74	47	3	1	241
食物学科	4	18	38	43	61	30	1		195
生活芸術学科	5	8	24	37	38	26	4	1	143
合計(人)	12	41	114	126	173	103	8	2	579

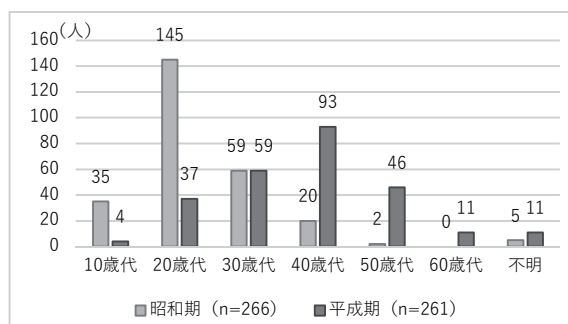


図1 昭和期と平成期の入学時年齢

しているが、食物学科と生活芸術学科では教育職が減少し、専門職や技術職が増加している。

入学時就労者の就労・雇用形態は、「常勤」や「正社員」が多数であるが、時代別では、平成期は、「非常勤」（昭和期入学 10%→平成期入学 35%）や「非正規社員」（同 10%→34%）の割合が高くなっている。これは全国の雇用形態の推移統計⁶⁾と比較しても、時代の変化と呼応している。

3.3 入学時に所有していた資格

入学者のうち 358 人（62%）は入学時に一つ以上の資格を所持している。昭和期では 66%、平成期では 58%と、昭和期入学者の方が高い。所持資格は幼稚園から高校までの教職に関する免許が多く、教職以外では栄養士、看護師、保育士などが上位である。学科別では、児童学科は幼稚園教諭、保育士、看護師が多く、食物学科は栄養士、中学 2 種教免（家庭・保健）、管理栄養士が多いのが特色である。生活芸術学科には中学 2 種（家庭）や中学 1 種（他教科）など教職免許の他、保育士、福祉住環境コーディネーター、販売士など多様な分野の資格が挙げられている。

4. 入学の目的と理由

4.1 入学の目的

入学の目的は「大学卒業の学士取得」が突出しており、「資格・免許取得」「自己の成長」「教養・生涯教育」「専門の学び」などが続いている（図 2）。

時代別では昭和期よりも平成期で、大学卒業、専門科目の学び、生涯教育の割合が高くなり、資格・免許取得は低くなっている。生涯学習の増加は、平成期入学者の年齢層が上がっていることとの関連も示唆される。ただし平成後期には、資格・免許取得の割合は、平成前期に比べやや増加している。

なお 2019 年度入学者の入学目的⁷⁾（単一回答）では、「職業上の資格を得るため」（35%）が「大学卒業」（32%）を上回っている。入学者の高学歴化が進んではいるが、2019 年度入学者には高校卒（25%）、短大卒（28%）がおり⁴⁾、大学卒業資格を得る目的は、近年においても未だに大きいと言える。加えて、教職に限らず資格の取得も入学の動機づけになっている。

4.2 通信教育を選んだ理由

通信教育という学び方を選択した理由は、「仕事との両立」「自分のペースで学べる」「家事・育児・介護との両立」が上位を占めている（図 3）。この上位項目は時代による違いはないが、「学費が安い」ことが昭和期（13%）よりも平成期（29%）で割合が高くなっている。

4.3 本学を選んだ理由

通信制大学の中で、本学を選択した理由（図 4）は、「家政学が学べる」「歴史と伝統」が上位であり、この 2 つの上位項目は時代による違いはない。なお

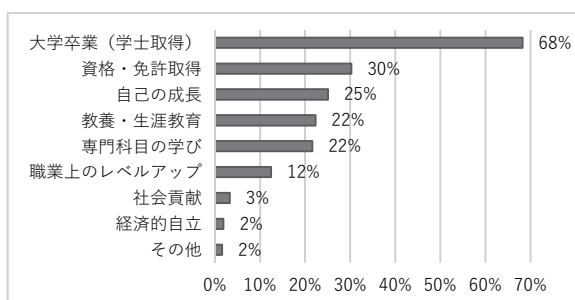


図2 入学の目的（上位2つ） n=578

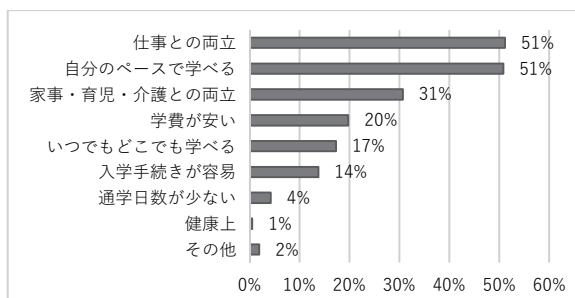


図3 通信教育を選んだ理由（上位2つ） n=567

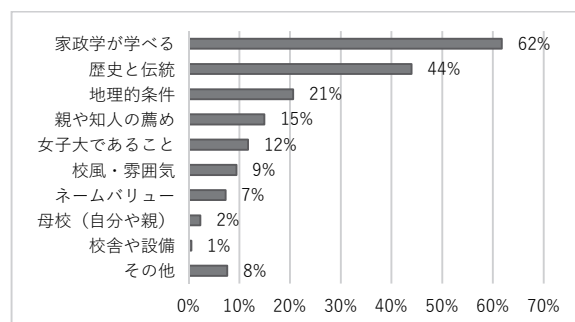


図4 本学を選んだ理由（上位2つ） n=562

「地理的条件」は昭和期（18%）より平成期（25%）で割合が高くなり、「女子大であること」（昭和期 17%→平成期 7%）や、「親や知人の薦め」（昭和期 20%→平成期 9%）の割合は平成期で低くなっている。本学の特徴である家政学や歴史・伝統は本学選択のポイントとなっているが、近年の入学者の選択理由は微細な部分では変化している。

5. 在学中の状況

5.1 在学期間・在学形態

卒業までに要した在学期間は、2～42年と大きな幅がある。最短4年で卒業できる1年次入学生の在学期間では「5～6年」が多く、6年以内に43%の人が卒業している（図5）。在学し得る年数である「10年」が次に多く、10年以内に82%の人が卒業している。10年超の在籍には在学延長手続きが必要になるが、20年超も少数存在している。この傾向は昭和期も平成期も同様である。

最短2年で卒業できる3年次編入・学士入学者の在学期間は「3年」が最多で、3年以内に30%の人が卒業し、在籍し得る6年以内に75%の人が卒業している。6年超は在学延長手続きをして在学し、最長者は20年である。

80%の人は卒業まで在学し続けているが、12%の人は途中で休学や退学・再入学し、在学を中断している。大多数が4年間で卒業する通学課程と異なり、就労と並行して学ぶ社会人学生が多いためか、卒業までに長い年数をかけている人が多数いる。なお転学科した人は3%である。

5.2 在学中の就労状況

入学時に就労していたのは、416人である。そのうち在学中も就労を継続したのは80%で、退職、休

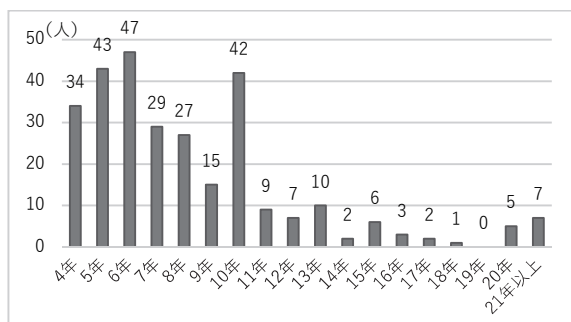


図5 1年次入学生の在学期間 (n=289)

職、転職したのは16%である。退職などの理由には、「スクーリング授業への参加のためにやむを得ず」のほか、「結婚、出産、介護などのため」が自由記述されている。仕事や家事・育児・介護との両立を目指して通信教育を選択しても、その実行は容易でないことが窺える。

5.3 学科を選んだ理由

入学した学科を選んだ理由（図6）は、児童学科では、「保育・子どもへの関心」（83%）、「教職免許取得」（41%）が上位である。食物学科では、「健康への関心」（81%）が多い。生活芸術学科では、「建築・住居への関心」（51%）と「衣類・服飾への関心」（50%）がほぼ同数である。「物づくりが好きのため」（20%）は3学科中一番多い。

時代による違いでは、「教職免許取得」は、各学科共に昭和期よりも平成期で低くなっている。

5.4 在学中に取得した資格

在学中に新たな資格を取得した人は34%いる。なかには3個の資格を取得した人もいる。入学の目的に資格・免許取得をあげた175人中では、105人（60%）の取得に留まっている。資格取得者の割合が高いのは児童学科で、主に教職免許である。

5.5 目的の達成と収穫

卒業したことで、88%の人が入学時の目的が「達成できた」としているが、「できなかった」人が10%いる。未達成の割合は昭和期（7.9%）よりも平成期（11.5%）がわずかに増えている。

達成できなかった原因として「仕事や結婚、妊娠、家族関係などによる教員試験の断念」「健康上の理

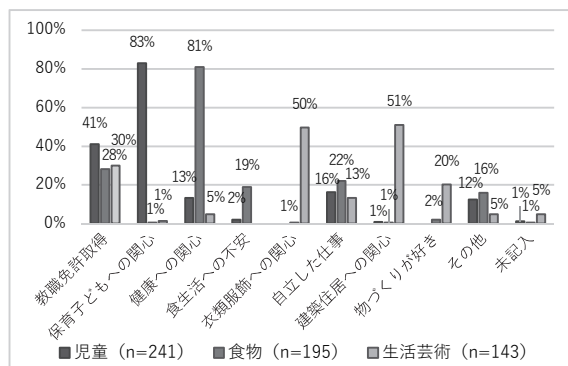


図6 入学学科別の学科を選んだ理由（上位2つ）n=579

由」「ピアノ技術の不足」「教育実習校が見つからない」「正規職員にはなれなかった」などが挙がっている。

目的以外の収穫では80%の人は「収穫があった」としている。仕事面や資格での収穫のほか、教員や友人との出会い、社会性や人間形成面での収穫、学習や学生生活での収穫などが380人から挙がっている（表2）。60%以上が平成期卒業生の記述である。40%以上の人が「友人との出会い」について記述しており、スクーリングなどでの出会いや交流が学習の励みとなり、生涯の友となっていることがわかる。

5.6 学科専門科目の学習

各学科の専門科目の学習に関しては、多くの具体的な学習の成果に関する記述が得られた。

児童学科（回答者数139人）

専門科目の学びによって、児童・子どもへの理解が深まった、自分自身の子育ての助けになった、仕事に活かした、社会参加やさらなる大学院進学や研

表2 目的以外の収穫（自由記述の抜粋）

教員・友人との出会い	<ul style="list-style-type: none"> ・有識者と直接話すことができ、多くのことを学ぶことができた。 ・素晴らしい先生方と出会い、女性としての生き方を学べた。 ・日本全国のひとと学習できたことがその後の人生で役に立った。 ・いろいろな職業の方と会話をし視野が広がった。 ・スクーリングで様々な職業、年齢の方々と知り合うことができた。 ・共に学ぶ方の向上心が励みになった。 ・意識の高い友に出会い、啓発された。 ・桜楓会活動に参加でき、たくさんの友人や先輩からの影響を受けた。 ・様々な職種経験の友人からたくさんの刺激を受けた。 ・モチベーションの高い人が集まるスクーリングで前向きになった。
人間形成	<ul style="list-style-type: none"> ・知識による生活の豊かさ。 ・学ぶ姿勢、学び続ける、さまざまな方面への興味。 ・広い視野で物事を見れるようになった。 ・精神的自立。 ・視野が広がり社会参加への足掛かりとなった。 ・生きていく意味、ものの見方、考え方が深く広くなった。 ・達成感を得たことにより今後の生活により意欲的になれた。 ・根拠を明確にし、意見を聞いたり発言できるようになった。
学習・学生生活	<ul style="list-style-type: none"> ・専門分野以外のことにも広く関心を持つようになった。 ・体育が好きになった。 ・音楽の授業に関心を持った。 ・文献を読む量が増した。興味が増した。 ・レポート作成で自分の考えをまとめ伝える訓練ができた。 ・幅広い知識の取得、大学で学ぶことの楽しさ。 ・卒業論文を書いたこと。 ・寮生活を体験した。 ・文章力、思考力がアップした。 ・軽井沢卒業セミナーの思い出、スクーリングの充実感。 ・苦手な科目に対しての意識が変わった。 ・通学スクーリングで通学生と一緒に学べた。 ・大学院への進学希望とゼミでの学び。
仕事・資格	<ul style="list-style-type: none"> ・教育者としての自覚、高い資質、専門性の高度化。 ・仕事に就けた。 ・大学院に進学した。 ・塾を開き生徒指導ができた。 ・保育資格を取得した。 ・教職免許を取ることができた。 ・大学卒業したことで再就職の道が開けた。 ・TESの資格取得できる知識の修得。

究に繋がった、などの記述があった（表3）。今後の期待には、2017年度を以って募集を停止した小学校免許の再開や、保育士資格取得への支援ほか、図書館司書などの資格が取れると良い、などが挙がっている。

食物学科（回答者数134人）

多くの人が、知識や技術を得られた、学び直しができた、食生活に学んだことを活かせたと回答している。管理栄養士の取得、教員採用試験の合格、大学院への進学で職場での地位が向上した、学ぶ姿勢が身についたなどの記述もあった（表4）。課題としては、地方に居住する学生は実験・実習のスクーリングを履修しにくい、通信の大学院に希望する研究分野がない、などが挙がっている。

表3 児童学科の専門科目の学び（自由記述の抜粋）

児童・子どもへの理解の深まり	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの発達について基礎的なことを学んだ。 ・児童の行動についての知識が生かされた。 ・児童心理学で学問としての心理学の姿をつかめた。 ・子どものすばらしさを知った。 ・子どもの発達過程の理解が深まった。 ・子どもの個性を受け止めて見守れるようになった。 ・児童文学について理解を深めることができた。 ・多くの子どもたちに関心を持つようになった。 ・子どもを取り巻く状況・社会について学んだ。 ・子どもの未来に大人の役割と責任の重大さを痛感した。 ・子ども自身の育つ力を信じる、という子ども観に至った。 ・家庭・社会、女性という視野で保育を考えられるようになった。 ・親子関係のあり方が幼少期の発達だけでなく、その後長い人生に強く影響すると理解した。
子育ての助け	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の子どもが生まれてから児童学科の学びが役に立った。 ・結婚後の育児に役立った。 ・我が子に発達障害があると感じ、発達心理学を重点的に学べた。 ・子どもの子育て、孫の子育てに大いに活用できた。 ・自らの子育ての参考になり、自信を持って子育てできた。 ・他の子と比べず育児書にも振り回されず、子どもの成長と向き合うことができた。
仕事への応用	<ul style="list-style-type: none"> ・児童に関する仕事だったのでとても役に立った。 ・児童について学んだことは、卒業後24年間の小学校勤務に役立った。 ・父母からの質問に自信を持って答えられるようになった。 ・児童心理学の専門職に生かされた。 ・小学校の相談員として、常に最新の児童情報を得ながら働けた。 ・テキストで学んだことを保育現場で実践に結びつけられた。 ・子どもたちへの学習支援に役立っている。 ・地域で幼児サークルを立ち上げた。 ・学んだ知識で周りの人へ助言できる。 ・発達支援に役立てるための学びを得られた。 ・児童心理学を学んだことで学校現場での相談活動に活かしている。 ・心の問題、発達に関して学んだことが看護師の仕事に役立っている。 ・幼稚園を作りたく、県に計画を提出した。 ・幼稚園教諭1級を生かして幼稚園で働めた。 ・児童福祉センターで勤務した際に、児童文学や音楽に関する知識が活かされた。
進学・社会参加	<ul style="list-style-type: none"> ・知識が深まり視野が広がり、いろいろな考え方ができるようになった。 ・児童学、保育への興味が広がり大学院に進学することになった。 ・修士論文で学んだ絵本を中心に日本語教育を研究している。 ・保育室の設立を思い立ち、学ぶことで社会参加できた。 ・海外の児童文学について学ぶことができ、多くの人に出会えた。 ・幼稚園の実習は、幼児の能力や園の運営など知ることができ大いに参考になった。

生活芸術学科（回答者数118人）

専門科目により知識や技術を得たこと、仕事への影響、日常生活への活用などが挙がっている。衣生活では、繊維や染料、洗濯に対する科学的視点、衣造形実習の理論と縫製技術、衣服の歴史や生活様式、色彩学の知識など。住生活では、建築の基礎、住まい方、地域、バリアフリーの視点、図面の書き方や設計の技術、住居・住宅の歴史の知識、などの記述がある（表5）。課題としては、生活芸術学科のPRが少ない、住居・建築関係科目が充実していない、2017年度に導入された二級建築士受験資格を卒業生もできる措置がほしい、が挙がっている。

6. 卒業後のキャリア形成

6.1 卒業後の進路

卒業後もさらに勉学を継続したのは112人（約20%）である。その修学先は、「大学院へ進学」（29%）、「大学の聴講生」（28%）、「大学進学」（21%）、「専門学校」（7%）、その他、本学のリカレント教育や桜楓学園ほかカルチャースクールなど

表4 食物学科の専門科目の学び（自由記述の抜粋）

知識・技術の修得	<ul style="list-style-type: none"> 食品学・調理学・栄養学について基礎から学べた。 短大の食物科で学んだことを復習し、新しい内容に更新できた。 食物に関する知識が深くなった。 食物について、様々な角度から学ぶことができた。 科学的な視点で見ることができるようになった。 最新の栄養学を学ぶことができた。 専門的な研究分野の知見を得た。 調理技術が向上した。 実験のスキルを身につけることができた。 調理科学の実験を行うことができた。 論文のまとめ方がわかった。
食生活への活用	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活に学んだことを活かしている。 食生活が向上した。 食品の選択の幅が広がった。 調理学が食事作りに役立っている。 毎日の食事に栄養学が活かされている。 家族の健康に学んだことを活かしている。 生活習慣病の予防を考えて食事を作るようになった。 栄養学で学んだことが、病人食を作るのに役立った。 介護に役立てられた。
仕事への活用	<ul style="list-style-type: none"> 短大で助手から講師になり、さらに助教授、教授になり、学科長も務めた。 国家試験に合格して、管理栄養士になった。 転職して公務員として研究するようになった。 47歳で教員採用試験を受けて、県の教員として勤務した。 家庭科教員として、授業で役立つことばかりだった。 事務職から教育職に変わり、高校家庭科教員として勤務した。 新しい情報を仕事に行かせて、自信につながった。 家政学をしっかり学んだので、社会状況が変化しても教員として楽しくしっかりと教えられる。
進学・その他	<ul style="list-style-type: none"> 勉強への意欲が高まり、大学院に進学した。 食に関する研究会に所属した。 料理教室で学び、料理教室の講師になった。 勉強が面白くなった。 調理の楽しさがわかった。 学び続ける姿勢ができた。

である。「卒業後に変化したエピソード」の自由記述から、在籍中に身についた学ぶ習慣や卒業による自信や達成感が、更なる探求心へ繋がったことが窺える（表6）。

大学院へ進学した人の卒業時の年齢は27～58歳と幅広く、85%は平成期の卒業である。この中には更に博士課程へ進学し、博士号を取得し大学教員な

表5 生活芸術学科の専門科目の学び（自由記述の抜粋）

知識や技術の修得	衣生活分野	<ul style="list-style-type: none"> 繊維や染料、洗濯などを科学的に学んだこと。 繊維や洗濯を科学的に捉えられた。 天然繊維や化学繊維の分子構造。 繊維の科学的物理的要素の理解。 衣造形実習で物を丁寧に制作する大切さを学習できた。 理論だけではなく、スクーリングで衣服制作の技術を確実につけられた。 市販ではわからない型紙の作り方のコツが学べた。 被服実習は楽しさ、達成感、興味が広がった。 被服実習で単衣を縫い上げた。 衣服の歴史と生活様式。
	住生活分野	<ul style="list-style-type: none"> 室内装飾、住居衛生学。 建築の基礎、住まい方、地域とのかかわりを再認識。 地域の住環境をバリアフリーの視点で考える重要性。 個人や家庭に住居が与える影響など考えた。 図面の書き方、住居設計がスクーリングで学べた。 設計の先生から提出物が遅れたことの重要性を教わった。 通信教育生に対しても指導され、先生に恵まれたことを感謝した。 住居・住宅の歴史、住生活教育により卒業論文が書けた。
仕事・資格への応用	衣生活分野	<ul style="list-style-type: none"> 衣食住を中心に家庭生活の指導ができた。 家庭科の教員として、講義、実習に学んだことすべて役立った。 家庭科の被服科専門教師として指導できるようになった。 繊維の学習が高校学校での指導に繋がった。 組みひもの体験が特別支援学校の作業学習に繋がった。 高校の家庭科全般に役立った。 学校司書教諭から家庭科主任・教諭としての就業を継続ができた。 学校での制服改変時に役立った。 TESの資格取得につながる知識の修得。
	住生活	<ul style="list-style-type: none"> 担当科目「家庭経営」に活用できた。 家庭科で、住や児童に関する分野まで実習ができた。 家庭科の指導効果を高められた。
日常生活への活用	衣生活分野	<ul style="list-style-type: none"> 洗濯時に洗剤を多く入れる必要が無いことを学んだ。 年齢の変化と衣服の選択を見直すことができた。 衣住の知識は世の中の変化に対応できた。 衣服整理学が毎日の洗濯、洗剤選び方に役立った。 行っていた洋服制作の知識と技術を深められた。 洋裁を習い続ける基礎となった。 しみ抜き知識と技術を修得し、ほぼ100%しみ抜きして着用している。 大量生産大量消費の問題、環境ホルモンなどの環境問題、毒性問題などに注意を払いながら衣生活を楽しめる。
	住生活分野	<ul style="list-style-type: none"> 自宅の改造や新築で間取りが決定できた。 マイホーム新築に役立った。 自宅の新築などで設計図を書いて業者に渡した。 自宅建設時にユニバーサルデザインや自然災害対策、安全性、動線などに活かされた。 家庭介護での住生活環境に役立った。 土地問題の解決に、根気よく対応できた。 建造物や内装デザインに興味を持つようになった。 効率的な動線を考えるようになった。 インテリアコーディネーター視点で、楽しく興味深く学べ、生活に活かされた。
その他		<ul style="list-style-type: none"> 他学科概論（児童、食物）でさらに専門的に学んだ。 教職指導科目が管理職として部下の指導に役立っている。 食物学科専攻だったが、衣服の分野まで広く学べた。

ど研究職に就いた人も複数名存在する。

就労状況の変化では、入学時に未就労の人の約40%が卒業後に就労し、入学時に就労していた人の約10%は卒業後に未就労となっている。学んだことを活かして就職に繋がった人がいる一方で、様々な事情で退職した人もいることが窺え、卒業後のキャリア形成は人により多様な選択肢があり、単純な物差しでは測れない。

6.2 卒業後に取得した資格

卒業後に何らかの資格を取得した人は43%で、複数の資格を取得した人もいる。教職系免許のほか、薬剤師、社会保険労務士などの国家資格や、民間資格が多数挙がっている。カウンセラーや介護・福祉関係、食生活や趣味の資格など多様な領域を網羅し、それらの資格は、仕事や社会活動など幅広い場面で役立てていることが記述から読み取れる（表6）。

6.3 卒業後の就労内容の変化

卒業後に業種が変化した人（81人）、職種が変化した人（89人）について、入学時と卒業後を比較した。業種では卒業後は公務員が減り、保育・学校

教育、学習支援業、福祉介護業の割合が高く、職種では、事務職、作業職が減り、教育職、保育職、技術職、研究職が高くなっている。この変化の理由には、専門科目の学びや在学中あるいは卒業後に取得した資格・技術との関連性が記述から読み取れる（表7）。

表7 自由記述の抜粋（卒業後の仕事の変化）

就職・転職	<ul style="list-style-type: none"> ・大学を卒業したことで再就職の道が開けた。 ・高校教員として定年までやり甲斐のある仕事を続けられた。 ・家庭科教諭に採用され、生涯、家庭科教育を実践、推進できた ・専業主婦だったが、高校と職業訓練校で非常勤講師ができた。 ・50代になって初めて中学の教員になったが、大学で学んだことが活かされた。 ・1級免許を取得したことで、35歳にして初めて幼稚園に就職できた。 ・知的好奇心が高まり、大学に勤務し研究、教育に専念した。 ・児童館などで幼児教室の講師をしたり、学童保育の仕事に就いた。 ・60歳目前だったが、卒業したことで積極的になり就職できた。 ・国立大医学系の研究室に10年勤め、技術補佐員として働いた。 ・学校事務職員だったが、教員免許取得し小学校教員に転職した。 ・就職して昇給した。 ・大学の保健室に就職できた。 ・老人介護の仕事に就いた。 ・薬剤師として働いている。 ・移住し都市型農業を始めた。 ・国立文楽劇場で文楽人形の衣装担当をした。
キャリアアップ	<ul style="list-style-type: none"> ・在学中に就職した研究機関では、大卒者として昇給してくれた。 ・学習意識が湧いて、転職先でより高度な内容の仕事に就いた。 ・転職した外資系企業では、就労しながらの学士取得を評価してくれた。 ・実習助手だったが実習講師となり、レベルアップした。 ・助手だったが、名実ともに教員になれ給与に手当てが追加された。 ・体育教師だったが、家庭科免許取得で失業することなく非常勤を続けている。 ・非常勤講師だったのが、常勤教員になった。 ・教育に加え、研究に従事する機会が増えた。 ・総合教育やクラブ活動等を任されて、意欲的に取り組み楽しんだ。 ・文章力が高まり、教員の仕事においても活かされた。 ・家庭科の講師として幅広い分野を担当できるようになった。 ・再就職先の社内外の試験にも、学習癖が身につけているため助かっている。 ・事務職から教育職へ変わった。 ・管理職になった。 ・卒業により自信が付き、よく考えて行動するようになり、昇進し役職についた。
内容の充実・展開	<ul style="list-style-type: none"> ・教育者としての自覚と高い資質を得られ、専門性が高度化した。 ・生徒との関わり方が変化し、人の輪が広がった。 ・特別支援の生徒に対する理解が深まった。 ・自分の仕事をしながら、専門的な講演や授業の依頼を受けるようになった。 ・児童小説で受賞し、大学通信教育をテーマに書籍を出版した。 ・医学的知識のほかに栄養学的知識が備わり、よく相談を受けるようになった。 ・専門性に特化した仕事ができるようになりハウスメーカーから設計事務所へ。 ・小学校教員から、保育園を立ち上げ、現在園長となる。 ・幼稚園非常勤勤務→産育休代替教育登録→現在は常勤で働いている。 ・保育園の食生活講座で講師を担当。管理栄養士と幼稚園免許が役に立った。 ・定年退職後、講師や司法に関する仕事をした。 ・62歳まで家庭科教育に携わった後、経験を買われ消費生活相談員として勤務した。 ・退職後もスクールカウンセラーとして務めた。 ・卒業後約30年間、自宅のスタジオでダンスのインストラクターをしている。

表6 自由記述の抜粋（卒業後の学業継続・資格取得）

学業の継続	<ul style="list-style-type: none"> ・さらに学び続けたいという気持ちが高まり、大学院へ進んだ。 ・自分の力を出し切る経験が大学院進学後も大学教員の今も役に立っている。 ・地道に努力すれば夢がかなうという自信を得られ、博士課程へ進学した。 ・卒業後本学に学士入学をし、幼稚園免許のための勉強を続け、取得した。 ・他大学（通信）で社会科の免許を取得。その後他大学の法学部に入学し卒業。 ・他大学文学部（通信）に入学し、卒論で貴重な成果を得られた。 ・他大学の聴講生になり、視野が広がりがネットワークがよかった。 ・色々なことを疑問に思い、他大学の公開講座に参加して学び続けた。 ・短期留学やホームステイなどの念願がかなった。 ・自分に自信がついて、リカレント及び地域の生涯学習をしている。 ・いつも勉強したいという気持ちでカルチャーセンターで万葉集を学んでいる。
資格の取得	<ul style="list-style-type: none"> ・自信が付き、教員採用試験に合格し、さらに他大学で特別支援免許を取得。 ・職員免許状の取得は、現在の仕事（学習塾の指導員）の元になっている。 ・やればできることを学び、税理士試験に合格した。 ・他大学へ聴講生として2年間通い、1級建築士を取得し設計事務所を開設した。 ・50歳になって管理栄養士の勉強を始め、2年後に合格できた。 ・卒業後保育士を取得し、絵本読み聞かせなど子育て支援に関わっている。 ・積極的に関わることに取り組むようになり、別の学士も国家資格も取得。 ・学びはコツコツやればできるという確信が持て、宅建に合格した。 ・学びたい意欲が芽生え英検やフードスペシャリストも受験した。 ・新しいことに挑戦してみようという気力が付き、中国語3級取得。 ・管理栄養士、社会福祉士を取得し、自信をもってボランティアができています。

6.4 現在の就労状況

現在、就労している人は約半数の279人である。就労先の業種は「保育・学校教育業」（約40%）が多く、その他は多種多様な業種に分散している。職種はやはり「教育職」（約30%）が多く、「専門職」「事務職」「保育職」が続いている。

年齢別でみると、教育職が70歳以上で減少するもののどの年代も最多である（図7）。高齢になっても学校以外の塾や習い事などの教育支援に従事している人が多いとみられる。これまでの経験を買われての再雇用や、就労を継続している人もいる。50歳代から60歳代では専門職が増えており、高齢になるにつれて「その他」の職種が増加している。

年齢別就労率を全国女性のデータと比較すると（図8）、どの年代も全国女性の就労率を上回っており、特に50歳代以上の就労率が高い。80歳以上で常勤も6人おり、最高齢は92歳である。50歳代

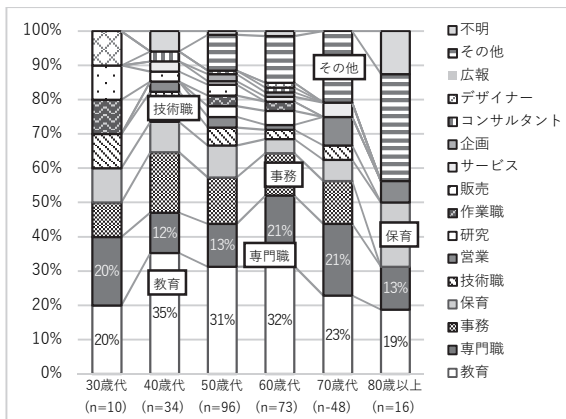


図7 年齢別現在の就労先の職種

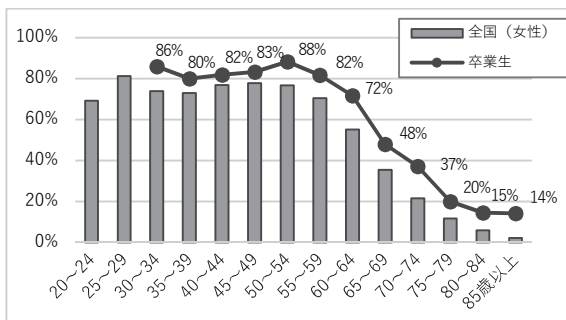


図8 年齢別就労率（卒業生・全国女性の比較）

（総務省統計局調査部国政統計課労働力人口統計室「労働力調査」平成29年就業構造基本調査 全国結果 2018-07-13）

を境として、若年層では常勤、正社員の割合が高く、高齢層では非常勤、非正規社員の割合が高くなり、70歳以上では自営が半数を超えている。高齢になるほど多様な働き方を選択していることが窺える。

7. 現在の状況と学びの効果

7.1 現在の地域活動

現在、398人（約70%）が地域活動に参加している。年齢別では60歳代、70歳代の参加率が高い。そのうち207人に活動内容の記載があり、趣味・学習サークル、福祉活動、自治会の役員など多く、責任ある立場でパワフルに活躍している人もいる。

7.2 卒業後に社会活動上で変化したこと

卒業により仕事や社会活動において変化したこと（図9）では、「活動上での視野の広がり」「卒業したことの自信・誇り」など精神面への影響や「学習の習慣が身についた」が上位であり、各学科ともほぼ同じ傾向である。仕事以外の地域活動や社会活動においても、卒業したことの自信や視野の広がりが礎となっているようである（表8）。

7.3 現在の関心ごと

現在の関心ごと（図10）としては、「健康」「趣味」「老後の生活」「仕事」「地球環境」などが上位である。年齢別では、「健康」への関心は30歳代と60歳代以降が高く、「仕事」は40歳代、50歳代が、「老後の生活」は60歳代の割合が高い。

7.4 学びが現在の生活に活かされていること

通信教育での学びが日常生活の中で活かされていること（図11）では「自信・誇り」「広い視野、価値観」が上位である。仕事や社会活動上の変化（図

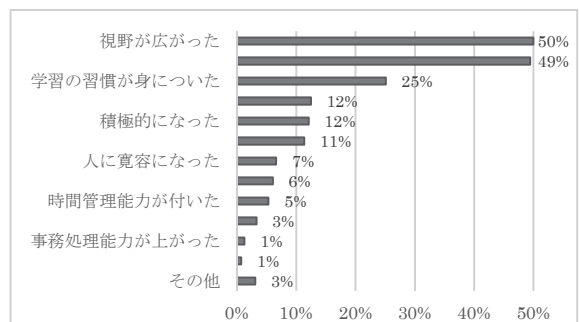


図9 仕事や社会活動上の変化（上位2つ）n=546

9) とほぼ同様の結果であるが、加えて「専門的な知識技術」「家政学の知識技能」「友人先輩との出会い」「学ぶ習慣」なども役立っている。自由記述からも精神面の成長が、大きく現在の生活に活かされていることに繋がっていることがわかる(表9)。

時代による変化では、平成後期では、卒業したことの自信、専門知識、家政学、学習の習慣の割合が他の時代より高く、「友人先輩との出会い」は昭和期に比べ低くなっている。

表8 自由記述の抜粋(卒業後の社会活動上の変化)

ボランティア活動	<ul style="list-style-type: none"> ・地元で子ども文庫活動に参加した。 ・子育て後、ボランティア保母として活動した。 ・自信がつき、小中学校で相談支援員になることができた。 ・ボランティアで、特別支援学校で子どもたちの支援をした。 ・退職後、公民館などで乳幼児や学童と関わるボランティアを始めた。 ・絵本の読み聞かせを老人施設でしている。 ・いろいろな方の悩みを聞く電話相談員のボランティアをしている。 ・視覚障害者への奉仕を続けられているのは卒業したことが基盤になっている。 ・積極的に行動を起こすことの大切さを学び、点訳のボランティアを始めた。 ・食生活改善推進委員として地域でボランティア活動している。 ・ボランティアで洗剤や掃除薬品の指導、教育相談員、環境問題研究員をした。 ・ワードやエクセルを教えるボランティアを行った。 ・子供会の役員やPTA役員になったときに、行事の企画など新しい提案ができた。 ・卒業した自信と誇りが礎となり、PTA活動、市の審議員など活動が広がった。
組織への参加・役割	<ul style="list-style-type: none"> ・全国組織の友の会で衣食住、家計、家庭教育や地球環境問題に取り組んだ。 ・思考力と実践力が身につく、シニア大学に参加した。 ・桜楓会支部への参加し、もみの木会、桜楓会の行事に参加している。 ・桜楓学園で手編み教室を担当して、その後の自信につながった。 ・通信教育の試験監督をして、若い人との話や違った分野の経験ができた。 ・海外生活が長かったが日米協会の婦人部の役員があり、活動できた。 ・海外の日本人のための会のニュースレターに食に関する記事を書いた。 ・NPO法人の代表理事の役目を引き受けた。 ・サークルの代表や責任者に名前があがり、多忙なことが多々あった。

表9 自由記述の抜粋(卒業後の生活・生き方の変化)

大学卒業	<ul style="list-style-type: none"> ・大卒です、と言えるようになり、履歴書を書くことが楽しみのようになった。 ・学歴コンプレックスがなくなり、付き合う人の範囲が広がった。 ・「やればできる」という実践ができ、人生について劣等感を克服できた。 ・卒業は大きな自信となり、新たなことへ挑戦する力となった。
学習習慣	<ul style="list-style-type: none"> ・忙しい中で隙間時間を使って勉強する癖が身についた。 ・自ら学ぶ探求心ができた。 ・資料など調べ方がわかった。 ・頭の中を整理して考えられる力がついた。記憶力が鍛えられた。 ・それぞれの学びはどこかでつながっていることを知った。 ・粘り強さと探求心、学ぶことの喜びを得た。 ・時代の変化に応じて社会をとらえ、学ぶ楽しさを知った。
生きる姿勢	<ul style="list-style-type: none"> ・自信を持って自分の意見を言うようになった。 ・自分の言葉で表現することが身につく、会議で積極的に発言するようになった。 ・物事を広い視野で考え、自分で考え判断し行動できるようになった。 ・つらいこともあったがそのことを通して自分を知ることができた。 ・知識が多く体に詰まって、人格が高まったような気がする。 ・新聞をきちんと読むようになった。 ・本を読む習慣ができた。 ・物事を地球規模で考えるようになり視野が広がった ・仕事を続ける上での女性としての姿勢を学べた。 ・心の中に大切にしていけるものは何かを明らかにすることができた。 ・ゴールを見据えて歩みを止めない大切さを痛感した。 ・体力と家事、仕事のバランスを見直すようになった。
家族関係	<ul style="list-style-type: none"> ・達成感が人生に役立ち、子どもに教育面でアドバイスできるようになった。 ・子どものできないことが許せるようになった。 ・子育てに役立った。 ・勉強する姿を子どもに見せられ、彼らの受験に対する姿勢に影響を与えた。 ・学びにより母親との関係に気づきがあり、自分と向き合うことができた。 ・夫から「馬鹿」と言われなくなった。 ・弁が立つようになり夫の立場を弱くした。 ・夫が高学歴で引け目を感じていたが、卒業して心が安定した。 ・視野や見識が広がり、夫の介護中もゆとりをもって対処できるようになった。
人との交流	<ul style="list-style-type: none"> ・日本全国に友人ができ、今でも何人かの人と交流があり人生が豊かになった。 ・もみの木会、桜楓会を通じた多くの友人先輩との交流は、人生を大きく変えた。 ・学習友の会を立ち上げた経緯から仲間づくりをして、お互いに向上できた。 ・年齢境遇の違う人との出会い、見識が広がりがちゆとりができた。 ・仕事上で女子大の先輩や後輩との出会いがあり、ネットワークが広がった。 ・様々な人間関係に心のゆとりをもって対応できるようになった。

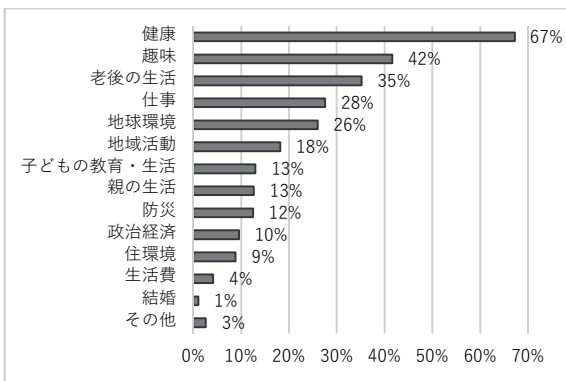


図10 現在の関心ごと(上位3つ) n=577

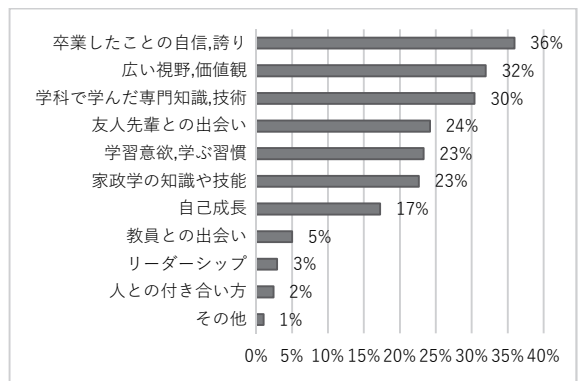


図11 生活に活かされていること(上位2つ) n=572

8. これからの通信教育へ向けて

8.1 さらに学びたい分野

仕事や社会参加のためにさらに学びたい分野には幅広い分野が挙がり「心理」「地球環境」「語学」「福祉」「食物」が上位である（図 12）。年齢別では、30 歳代は語学や食物、40 歳代以降は福祉や消費生活、児童などである。ICT は高齢になるほど割合が高くなり、新分野への積極的な向学心が窺える。

8.2 本学通信教育課程への期待

今後の本学通信教育課程に期待したいことでは、「いつでも学び直せる場の提供」をはじめとする多くの意見が挙がっている（表 10）。家政学や教育理念の継続を望む人がいる一方、新分野の学科や科目、資格に関する提案もある。学習方法では、教育レベルの維持とともに、ICT 化やグローバル化などへの期待もある。そのほか広報の方法や卒業生への支援の注文もあり、母校愛や本学の発展への期待は大きい。資格、大学院、ICT 化、卒業生への要望の項目では、平成期卒業生のコメント数が多かった。

9. まとめと今後の課題

本調査の結果は、以下のように要約できる。

- ①入学者は、昭和期は 20 歳代中心の高校卒や短大卒が多く、就労者は保育・学校教育関係や公務員が多かったが、平成期では中高年齢層や大学卒者が増加し、就労内容は教育関連以外の多様な業種、職種に広がり、入学時の状況は多様化している。

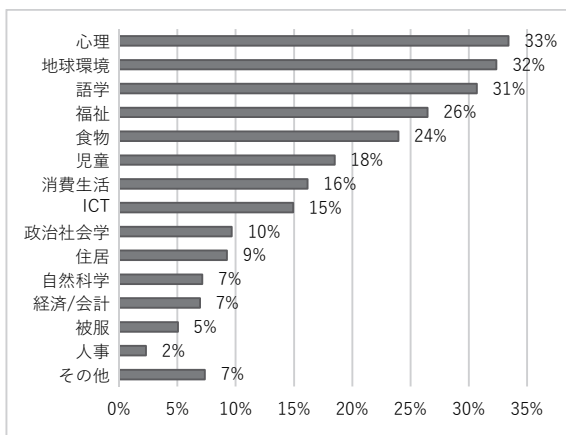


図 12 さらに学びたい分野（複数回答）n=476

- ②平成期の入学時の職種や所有資格からは学科ごとの特色がみえる。児童学科は保育や学校教育関係、食物学科は栄養士などの専門職が他学科に比べて多く、生活芸術学科は、多様な職種、資格に分散している。

- ③入学の目的は、大学卒業や教職も含めた資格取得や生涯教育などで、本学の選択理由には家政学の学びや伝統のほか、平成期では微細な変化もみられる。

表 10 本課程への期待（自由記述の抜粋）

項目		数	主なコメント内容
学びの場の提供の存続 生涯学習		73	学びたいと思った時に学べるところであってほしい。 学び直しの場としていつでも開かれた大学でいてほしい。 今後も変わらないことを期待、更なる発展を望む。
家政学、伝統や理念の 継続		20	人間生活に必要な家政学の維持、存続。 成瀬仁蔵先生の女子教育への思い、精神を繋ぐ。
新分野の学科、科目の 提案		26	文学部、人間社会学部、芸術関係、園芸、理系、経済 時代に合った新分野、情報処理、危機管理、幅広い分野
資格に関する提案		31	保育士、栄養士、管理栄養士、小学校教員の再開。 追加履修で二級建築士、資格に繋がる支援プログラム。 資格のフォローアップ講座。
大学院への希望、要望		6	いつか大学院で学びたい、専門科目を増やしてほしい。
教育 学習 方法	I C T化	15	レポート提出のWEB化、動画配信による受講。 ネットを活用した授業、世界のどこでも学べるように。
	スクーリング	19	実習の科目増、開講時期の工夫、地方での開講。
	教育内容、レベル	11	本学らしい質の高い内容とレベルを維持してほしい。 魅力的な内容、レポート課題は簡易なものに。
	その他	32	卒業までの学習サポート、学生とおしの交流。 試験会場や開始時間の見直し、ゼミ・卒論の希望。 通学生との交流の場、世界の通信教育との連携。 男性、LGBTも含めて門戸を開くべき。
広報への要望		23	通信教育のすばらしさをもっと発信してほしい。 何歳になってもチャレンジできることをアピールしてほしい。
卒業生へのサービス		26	卒業生向けの資格支援、公開講座、科目履修、聴講 地方での講演会、卒業後のリカレント教育。
母校への感謝・その他		17	丁寧な指導をしてくれた教員や職員への感謝。

- ④仕事や家庭生活との両立を目指して通信教育を選択している人が多いが、在学期間は長い人が多く、学業との両立には困難が多いことが窺える。
- ⑤入学時の目的を達成した人は 9 割近くおり、「友人との出会い」や「人間形成」など、目的以外の収穫も多く挙げられている。
- ⑥卒業後は進学、資格取得、就職、キャリアアップ、社会活動など個々には様々な展開があり、高齢になっても多様な働き方で社会参加をしている人が多い。
- ⑦本課程での専門科目の学びや卒業したことが自信や誇りになり、生き方や人間関係、地域活動や日常生活など多方面で学びが活かされており、更なる向学心も窺える。

本調査の結果から、本課程 68 年間の時代の変化に呼応した学生の状況の変化や、卒業後の進学、就労、地域活動、生活面で学びの活かし方の幅広い展開を知ることができた。本課程の学びが、一人一人の様々なライフステージに意義があり、生涯教育に対しても、責務を果たしていることを再認識した。

これからの通信教育課程や学科の専門科目についての考察としては、多様な学生のニーズに対応するカリキュラムの再構成が挙げられる。目的別に選択の幅を広げるなど複合的に編成する必要がある。付随して資格取得の支援、本学の通学課程や社会人大学院との連携、社会の変化に対応した新分野の創設などが考えられる。

学習指導方法としては、ICT の活用がある。インターネットなどメディアを利用することで、教育内容の幅が広げられ、学生の学びの自由度もさらに高められる。連動してテキスト科目、スクーリング科目の授業形態や試験方法の改革が課題となろう。

本課程では 2016 年度より 4 人の専任の特任教授が着任し、教職以外の新資格取得のためのカリキュラムの導入や、個々の学生への学習支援、様々な広報活動にも力を入れて来ている。本稿もこの 4 人で取り組んで来た成果の一つである。

2020 年度からはテキスト科目での LMS の利用を本格的に導入している。またコロナ禍のために、スクーリング科目は遠隔で行わざるを得なくなり、2020 年度は急速に ICT 化が進むことになった。地

方や海外に居住する学生や、仕事との両立や通学が困難な学生にはメリットが多いが、学生同士の交流は難しいなどの新たな課題も見えてきている。

2016 年度以降の本課程の改革の効果については、今後 5 年、10 年後に検証を行う必要がある。本調査の結果を踏まえて、多様な学びたい人に応えられるよう、更なる本課程の発展へ繋げたい。

謝辞

本調査にご協力いただきましたもみの木会の会長はじめ会員の皆様に、心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 文部科学白書 平成 30 年度 第 2 部 第 3 章 生涯学習社会の実現 https://warp.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/11509864/www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201901/detail/1421865.htm
- 2) 日本女子大学女子教育研究所；日本女子大学通信教育課程卒業生に関する調査，(1991)
- 3) 真橋美智子，沖田富美子，佐々井啓，塚原典子；日本女子大学の卒業生実態調査—第 2 報通信教育課程卒業生の場合—，日本女子大学紀要 家政学部 第 49 号，pp13-22，(2002)
- 4) 日本女子大学通信教育課資料「2019 年度入学者について」
- 5) 男女共同参画白書平成 27 年度版 I-6-1 図 学校種別別進学率の推移（文部科学省 学校基本調査による） http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h29/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-05-01.html
- 6) 総務省統計局 正規・非正規雇用の長期的な推移 <https://www.stat.go.jp/info/today/097.html>
- 7) <http://www.jwu.ac.jp/ccde/news/2020/20200803.html>《動画》日本女子大学通信教育課程へようこそ！（1,5,6,7 共 2020 年 9 月 17 日閲覧）

註

- 1) 全国の大学進学率に比較して、平成期の入学者の大卒者が 6%と小さいのは、大卒の入学者の中には本学で目的を果たすと卒業を待たずして退学し、本調査の回答者になっていない場合があるためと推察できる。

